

コート	担当	担当クラブ
4月	5月分のコート	本町B
5月	6月分のコート	青葉A
6月	7月分のコート	美住C

発行責任者 柳 利夫
 住所 東村山市萩山町 5-6-26-301
 Tel. 0423-95-9849
 編集責任者 川村英明

市民テニ第12回定期総会報告 (前号からの続き)

(3) 昭和59年度活動計画 (前号からの続き)

ロ. 広報部活動について (川村部長)

1. 原則として月はじめの土、日に発行 (コートで配布) できるようにします。記事の都合で遅れても、第2土曜日には配布できるようにします。
2. 内容面では、会員にとってもっとも必要とされるもの (お知らせ、運営委員会と各部報告) とくに会の運営にかんする記事を優先して掲載します。
3. 「ガット」作成の各クラブ持ちまわり方式を定着させながら、紙面の改善に努めます。今後の体制として、各クラブから3名の広報部員制を検討します。編集・原稿依頼・作成まで、担当クラブでやれる体制をめざします。
4. 印刷は現行どおり業者に委託します。ワープロ利用については検討してみます。

ハ. 事務局活動について (笹野井事務局長)

1. 昭和59年度の 新入会員と 総人数

	新入会員	総人員 (含 保留)	昭和58年に 対する 増減
東住クラブ	9	65	-4
恩多クラブ	6	84	-21
本町クラブ	15	67	-15
青葉クラブ	12	48	-21
美住クラブ	28	84	+3
計	70	348	-58

創立以来初めて総人員の減少をみました。

2. これまでのクラブ運営、指導体制とその反省の上になって、「人間的感覚をスポーツ (テニス) の喜びを基盤にして得る」という原点に立ち帰るべく、今後のより良い市民テニスクラブの構築に向けて諸々施策し、実施して行きたい。

① 市民テの会員意識の再確認とその趣旨の徹底
 コートトリの役割分担と責任、コート整備、練習方法、ボール拾い、会費の納入、名札、十年のあゆみ、マーク等々、会則前文や入会のしおり等であらわれておりますが、なお今後とも「ガット」、コートでのミーティング、個別その他の全ゆる方法で実施してゆきたいと思ひます。(ア)

※ コート使用について

59年度春季大会等が下記の如く行われますので、定期月練習、自由練習のコート使用はできません。

記

- 4月15日 (日曜日) 男子ダブルス (A、B)
- 4月22日 (日曜日) 男子ダブルス (A、B 続き)
- 4月30日 (月曜日-休) 混合ダブルス
- 5月6日 (日曜日) 女子ダブルス (A、B)
社年ダブルス
- 5月13日 (日曜日) } 以上の予備日となっています。
- 5月20日 (日曜日) }
- 5月27日 (日曜日) 太田杯、団体戦 (男子)
- 6月3日 (日曜日) ' ' (女子)
- 6月10日 (日曜日) 同上予備日となっています。

② 運営委員会の定期開催 (毎月第2日曜日 13:30~)
 スポーツセンター 2階

③ コート整備主務者を設置し、整備体制を作ります。

④ 合宿— 夏季合宿の他に春その他を含めて計画、専門委員制ですすめます。

⑤ 事務局体制の充実— 女性の参加と運営への反映

(4) 昭和59年度予算 (早川部長)

前年度好評だった各クラブ運営費を増額するほど若干新鮮味を加えた予算案の説明があり、前号 (No.85) 裏面にある通り承認されました。

(5) 昭和59年度役員選出

名誉会長	太田 芳郎	財政部長	早川 洋一
相談役	浦川 親俊		松本 美智子
〃	阿辺川 貞夫	事務局長	笹野井 孝之
会長	柳 利夫		松井 貞二
技術部長	武谷 直也		山口 悦子
〃 副部長	長井 庸二		武田 栄美子
広報部長	川村 英明		中根 一夫
〃 副部長	佐藤 多喜男	監事	工藤 昭洋志
			杉山 邦夫



私とテニス




東住クラブ

木村 宏

私が市民テに入会したのは、79年7月であります。職場の友人と、土曜日の昼ごろ、久米川コートで練習を終えて、ベンチに腰かけていると、そこに東村山のお百姓さんが、ラケットを持って現れたのです。でかい名札とベニヤ板をかかえていて、名札には「柳利夫」と書かれていました。そこで、市民テというものを知り、入会申し込みをしました。それが私のテニス狂いのはじまりでありました。

学生時代に硬式庭球部に在籍、球もろくにさわらないうちに、部費滞納及び練習長期欠席でクビになり、その後もやりたい気持はあったのですが、果たせずにいました。

なお、庭球部在籍時の公式戦全戦績はノ勝ノ敗、内容は関東理工系リーグ新人戦、1回戦で勝ち、2回戦で負けました。ついでに、部の1年後輩に、恩多クラブの増沢一浩がおります。これは兩人とも最近知ったことではありますが、その夜、一浩は寝っかかれなかったそうであります。

市民テにはいると、当時のNO.3コート「笹野井、藤岡教室」で教えていただくことになりました。コーチの熱心さとともに、生徒もことのほか熱心で近所並みに隣りのコートのひんしゃくを買うほどでありました。半年ぐらいたって、武谷コーチがビッグ・ブレーテン直伝のトフ・スピン打法を紹介してくれたのです。そのデモンストレーションのストロークが奥によくネットを越してベースラインにおさまるのであります。さっそく、本を買いこんで読みました。また、コートの行き帰りには、グリーンテニスクラブのネットにはりついた  の看板を見つめながら、自転車を走らせたのであります。(私とテニス一つづきのないPART 1—おわり)



ひよ一巻の人

不治の病と言われている
ほんとうに「聖」の人

とほいすき! 人

(右折)

です。彼は言葉にはしなかったものの、心で「テニス万才」とさげんた」と聞いています。後日の手紙に彼はこう書いています。「マタハル」が去っても市民テは不滅だ」と。

『市民テの皆様、お元気で過ごしてですか。私はこちらに来てからも相変わらずテニスの毎日です。みなさまもテニスに、そして健康にはお気をつけて下さいませよう。帰国できた時には、またよろしく御指導願います。』 (おわり)

A Letter from California

マタハル(仮称)とテニス

本町クラブ 休部会員 坂井 雅治

マタハルとテニスは「とんかつ屋」から始まったのです。いつも通っているとんかつ屋のおやじに向かって「何かスポーツやんはさまだめかな」とつぶやいた初老の青年、25才を過ぎた彼にはこれというスポーツはやっていなかったのです。おやじの紹介により聖苦しい名前のテニスクラブを知り、昭和56年の正月明けから楽しい生活が始まるうとは思いません。友人から拝借のラケットを持ち、初めてみる白いふさふさした丸い玉を追いかけまわし始めたのです。それまでは休日といえば朝は遅く起き、一日中ブラブラと過ごしていた彼はウルトラマンの如く変身したのです。朝は5時半に起き、このクラブの早朝の鬼と共々、6時にはコートに出向き、まずは手袋。シートを丸めて白い息を吹き、あたりをしないのに一生懸命、サーブといえはろくに当たってこないへんちよ二球。それでも相手をしてくれた「早朝の鬼」には感謝しているのは今日の彼をみれば誰でも否定できないでしょう。話を戻して、1年目の彼は初心者、しかし朝日とともに始まり夕日とともに終る彼のテニスの相手は初心者ばかりでなく、このクラブの初級中級者もいたのでした。彼のテニスの才能も限りはあるのです。ただあほなだけの熱心なところが二年目には初級三年目には中級と賞いたのかもしれません。ただここで一言断っておきますが、この着実な上達は彼の持つ年上を「へ」とも思われない気性、口の悪いところがクラブのプラス分岐を決定する機関を動かしたのではないかという推測もされているようです。

もう一つ「早朝の鬼」に加え、彼に大きな影響を与えたグループがいたのです。それは約1名の中年を筆頭に30過ぎも数名いる「若手」と称する集団だったのです。彼らとのつき合いはテニスによって始まったのですが、テニスばかりに限らず、テニスを終えた後の夕飯、雨の日コートが使えないときの遊びと発展したのでした。ここに彼の日記を紹介しましょう。「〇月〇日、テニスを始めて2年が過ぎた。市民テに入ってよかった。テニスだけでなく様々な人達に出会い、いろいろな経験ができた。テニス万才。」

彼人と幼稚な日記だろうか、しかし彼の言いたい事は理解できると思う。テニスを始めテニスを通じ、そして東村山市民テニスクラブ協議会(ほんとうに聖苦しい名前だ)を通じ彼の人生経験を豊富にさせてくれた「アマテニス」に感謝しているのです。現在の彼はといえば、市民テの七き人。昭和58年8月28日、仕事とはいえ、涙を押え離日したのです。当日は会社の見送りにきた同僚より多い11名の仲間が見送りにきたの (←五下へ続く)